

様式③

提出日 2019年 1月 11日

2018年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ

「女性たちによるムラおこし活動

～地域活動の核としての女性たち～」

氏名：山城舞茄

所属学部学科：人文学部こども文化学科

I. 研究の目的、動機

ゼミの中で、国頭村のイベントのお手伝いをしたり、離島に行く機会が多くあった。そのお手伝いをした場所で出会う人々のパワーにいつも驚かされている。その中で私は、女性が地域のために活動している場所がとても活気あふれているように感じた。表立って仕切っている人は男性というイベントでも、裏で女性が料理を作ったり、運営の細かい作業をしているという姿もたくさん目にした。

また、離島や僻地には共同売店がある。今回はその共同売店を一つの共通点として、どう女性が地域で活躍しているのかを知りたいと思った。

今回は地域で活躍する女性にスポットを当てて聞き取り調査を兼ね、研究していきたいと思い、研究のテーマにした。

II. 研究方法、地域、期間

2018/10/21～10/23 与那国島与那国町比川

III. 結果

与那国島比川共同売店での調査

比川共同店は建物が町立民営であり、経営は民営という他の共同売店とは異なる店である。今回の調査は、その比川共同店の運営を始めたときのメンバーの一人である女性にお話を聞かせていただいた。彼女は出身は東京であり、与那国島に移住をして暮らしている I ターン者の一人である。学生時代には美術を専攻しており、沖縄のものづくりが丁寧であることに憧れを持っていたそうだ。そして、自分の生涯を暮らす場所を探して日本の南の沖縄、最西端の与那国島からスタートしたが、そのまま与那国島で暮らしはじめ、今に至る。

比川という地域は、もともと共同売店はなく、個人経営の商店のみの地域だった。しかし、その個人経営の商店も 10 年ほど前になくなっている。集落にお店がなく、そのため、あまり遠くへ買い物に行くことができないおじい、おばあが買い物ができる場所がなくなり困っているという現状だった。

共同売店の様子

インスタント食品もとても充実しているが、日持ちする缶詰やお菓子、地域の特産品なども売っている。学用品や生活必需品のほかにも、USB メモリがあったり、携帯用の裁縫セットがあったり、どこか 100 円ショップのような場所でもあるように感じた。入口に入ってすぐのどこ

ろには、比川共同店のとてもかわいいオリジナルグッズがおいている。デザインが得意な従業員の方がデザインをして商品化したそう。日持ちする缶詰や調味料は、私たちが普段利用するスーパーなどに置いていないような変わったものがあったり、面白いものも売っているため、比川地域以外からもお客さんが来るそうで、与那国島を観光する観光客にも人気。また、買い物以外にも、『ひない文庫』というちょっとした本を貸し出すスペースがあったり、お店の奥にある畳の間に休憩ができる場所や、無料 Wi - fi、無料パソコンがあったり、気軽にお店に来たくなる工夫がいろいろなところにあった。

その比川共同店は、経営に関しては素人であった主婦が集まって、運営をはじめ、現在も続いている。作った当初は、大富で経営のやり方を一から学び、インターネットを駆使して安い仕入先を探し、年収 4000 万円ほどの売り上げを作った。最初のころは従業員のほとんどが I ターン者であり、地域からあまりよく思われなかったこともあったそう。しかし、今では、郵便の受付をお願いされたり、住民からほしいものの依頼を受け、その品物を仕入するなど、比川の住民になくはない存在になっている。

比川共同店がほかの共同売店と異なるところがもう一つある。それは、お酒を売っていないところだ。通常、共同売店は、お酒やたばこの売り上げが大部分を占めている。しかし、比川共同店は共同売店の大きな売り上げになるお酒を置いていない。理由は、主婦で運営しているため、クリーンなイメージを持ちたいという思いがあるそう。

始めた当初は I ターン者が多かったが、現在は 30～65 歳の女性(島人:9 人 I ターン:3 人)12 名の従業員でお店を運営している。シフトは以下である。

①7:00～13:00

②13:00～18:00

③18:00～20:00(18:00～22:30 の時間帯は主婦では長時間の勤務が厳しいため、時短。)

④20:00～22:30

通常の共同売店は、19 時～20 時までの営業であるが、比川共同店は 22 時半まで空いていることにとっても驚いた。そして、主婦も多いため、夕飯時の時間帯や子どもが寝る時間帯は 2 時間という時短の勤務での対応をしているところに、女性ならではの働き方を感じる。

とてもアイデアが豊富な従業員ばかりで、なぜそんなにアイデアが思い浮かぶのか聞いてみた。「日常生活の問題。家庭でも、奥さんが買い物に来て旦那さんは来ないということも多い。自分たちも利用しているお店であるから、おのずとお客さんのニーズがわかってくる。そこでアイデアが生まれる。比川は周りのお店があまり購買力のない店が多いし、ここしか共同店はないから、地域の条件がいいということもある。」ということである。

比川の地域性からすると、ここ以外のお店に歩いて行くことは子ども連れや高齢者だと困難という状況のなかであるからこそ、ここに買いに来ることは住民の日常になっていると感じた。また、住民が求めているものや、何を置いたら売れるのかというアイデアを楽しみながら考えてやっているように感じた。

私たちが楽しいものであればどんどんアイデアが思い浮かんでくる。それを実践しているのがこの従業員だと思う。

そして、島のために頑張るのはなぜか聞いてみた。「自然がたくさんで、おだやかなこの島で子育てはとてもしやすい。そして、自分の住みたい地域に住むことができるというのはとても幸せなことだと思う。だからこそ、よりよく暮らしたい！この地域をよりよくしたい！共同売店をよりよくしたい！という気持ちになる。」とおっしゃった。女性はいい意味で仕事と家庭が切り離せない。この売店では、客観的にお店を利用する自分もいれば、経営者として関わる自分もいる。生活と仕事が混ざっている部分をうまく生かして経営している様子を見ることができた。

また、他の地域の共同売店は、歴史や伝統があるところもあり、うまく運営できていないところもある中で、共同売店がもともとなく、その歴史もなかった比川地域では、比較的新しいことを始めやすかったと言う。しかし、与那国島には高校がないため、子どもが大きくなり、高校進学の際になると、島に住んでいた人々が家族で那覇に引っ越すということも少なくないようだ。そのため、共同店で働いていた人がやめるケースも少なくない。Iターン者だと島を出るケースも多いようだ。



長命草のお茶を作っている方の
顔写真とコメントも POP にしている



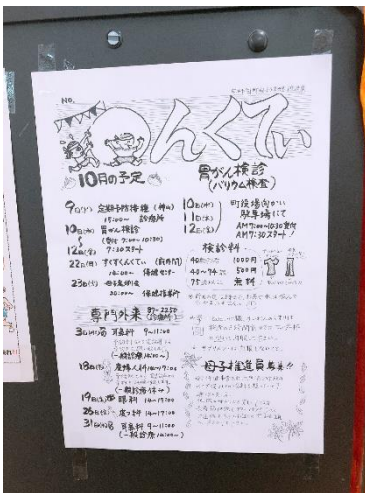
共同店の奥の畳間
レンジやポットも利用できる



USB メモリも販売している。



携帯用に持ち歩けるものもあり、観光客向けでもある。



月の予定をお便りとして掲示もしている。

IV. 考察、分析

いずれも女性が再建、作った共同売店であり、女性の柔軟な考えに触れることができた。どうして女性はこんなに柔軟に物事に対応できるのであろうと考えた結果、私はこう考える。

女性は良い悪いは別として、現実的に仕事と家庭が切り離せない。それはこの売店という職業だけには限らないが、売店で例を挙げるとすると、客としてお店を利用する自分もいれば、経営者として関わる自分もいる。どちらの共同売店も、生活と仕事混ざっている部分をうまく生かして経営している様子を見る事ができた。

また、男性女性に限らず、その良さを生かすことができる人材がその地域にいたということも大きく関わってくる。女性の社会進出が表立ってきた世の中だが、ただ単にスキルアップや地位だけのための社会進出ではないような気がした。

都会で仕事をした後だからこそインターネットを駆使して売店のなかった地域に安く仕入れをすることができたこと。また、社会に出て仕事をしたからこそ、新しいことに取り組んでも、物事の進め方の枠をとらえ、次に何をすべきかを計画できるという力がある。ライフスタイルの変化に比較的柔軟に対応できる女性だからこそ、その時の自分の色々な立場を利用した視野でみることができるのだと感じた。

共同売店の運営に関しては、基本的なことを当たり前に行うことがまずは大事だということに気づかされた。廃棄された商品の一覧表を細かくつけて商品を管理したり、お客さんのニーズをチェックしたり、商品が目につきやすいお店のレイアウトを考えるなど、本当に基本的なことが実行されていた。そのうえで、何をしたら地域のためになるのか、何か楽しいことはないか、みんながやりたくなることはないか、という義務ではなく楽しみながらやることで周りが理解し、ついてくるということも感じた。

①コンビニのように『今すぐ必要なもの』『高くても買ってしまうもの』②100円ショップのように『ここに行ったらあるかも…と思えるお店』③スーパーのように『いつもここに行ったらあるもの』という3つの要素がこれからの共同売店に求められるものではないか。車を少し走らせれば安くていろいろな物が手に入れられる世の中になってきている反面、地域のためのお店であり、地域になくなくてはならないお店でいるためには、共同売店自体も時代とともに変化していくことが求められると考える。

そして、それらの変化に対応するためには、女性の力が欠かせないことが今回の調査でよく理解できた。共同売店だけでなく地域そのものが活性化するために必要なことは個々の女性の力とチームワークであると結論付けたい。

V. 終わりに

今回の調査によって、地域のために頑張る女性たちに直接会って話を聞くことができた体験は、これから社会に出て働く私にとってもとても貴重な経験になったと思う。いろいろなところで色々な方が何かのために頑張っている姿はとても勇気づけられました。調査に快く協力していただき、貴重な時間を与えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

VI. 参考文献、調査協力

宮良作・宮良純一郎(2017)『与那国島誌—東アジアの南向き玄関口』南山舎.

池間栄三(1959-1984)『与那国の歴史』発行者池間苗

宮城能彦(2003)『村落と共同店』沖縄大学研究所所報

VII. 指導教員コメント

調査にも同行しましたが、とても熱心でかつ問題意識が明確なことが素晴らしいと思います。問題意識が具体的だったので、インタビューに答えてくれる方も話しやすそうでした。そして、それらを良くまとめてわかりやすく明晰な文章になっています。

離島や農漁村の村落における行事等は男性が表にでてきて、女性は食事の用意や後片付けなど裏方をやることが多いのですが、実は、ムラの活性化においては女性の力こそが重要であることがこれらの調査によって具体的に理解でき、学生による調査報告書として申し分ないと評価します。

(宮城能彦)